長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書

（中山5号塚
座禅塚）

1978

長岡市教育委員会

長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書

（中山5号塚
座禅塚）

1978

長岡市教育委員会

序

この調査報告書は長岡ニュータウンの建設にともない長岡市が地域振興整備公団の委託を受けて，実施した「中山5号塚」「座禅塚」の埋蔵文化財発掘調査の記録です。

このたびの調査対象となった「中山5号塚」「座禅塚」の所在する西部丘陵地帯には新しい総合的な機能をもつニュータウンが計画されています。今回の調査によって発見された古銭や遺構を見る時，この緑に包まれた丘陵に我々の先人達の生活の跡がしのばれ，感慨深いものがあります。いうまでもなく文化財はその地域や，わが国の歴史を正しく理解するために欠くことのできないものであり，かつ，将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。本書が地域文化の認識，また学術研究のために広く活用されることを希望してやみません。

最後に今回の調査にあたり計画から実施にいたるまで格別の御配慮をいただいた地域振興整備公団の方々はじめ，直接，間接に御協力いただいた調査員，地元の方々，関係各機関に心からお礼申しあげます。

昭和53年3月

長岡市教育委員会

教育長　横　田　　博

例　　言

1. 本書は長岡ニュータウン建設に伴って実施した新潟県長岡市宮本東方町字中山1861－1に所在する中山５号塚と長岡市雲出町水梨3290に所在する座禅塚の発掘調査の記録である。

2. 調査は地域振興整備公団から長岡市が委託を受けて市教育委員会が調査主体者となり，中山５号塚を駒形敏朗が担当し，座禅塚は寺崎裕助が担当して実施した。調査には金子正典・品田高志（中山５号塚）と波田野至朗（座禅塚）の協力があった。

3. 遺跡，遺構の写真撮影，測量及び遺物の整理・復元には駒形・寺崎・品田・波田野があたり，本多昌治の協力があった。

   なお，中山５号塚発見の第２号炭焼窯の写真（図版第８図下・図版第９・第10図）は種村貞二氏の撮影による。

4. 挿図のうち，断面図わきの数字は標高を示す。

5. 中山５号塚のベンチマーク設置には信濃測量の協力があった。

   中山５号塚の地山面認定は応用地質研究所々員に依る。

6. 本書は分担執筆をしたもので，文末に執筆者の氏名を明記した。

7. 発掘調査から遺物整理および本書の作成まで，多くの方々や機関から御指導・御助言・御協力を賜りました。氏名等は明記しませんが，ここに深く感謝します。

目　　次

序　　説

1. 発掘調査に至る経過 …… 1
2. 遺跡周辺の環境 …… 2
   (1) 地理的環境
   (2) 歴史的環境

Ⅰ　中山5号塚発掘調査報告

1. 発掘調査の経過 …… 4
2. 外部形態 …… 6
3. 土　　層 …… 8
4. 内部構造 …… 8
   (1) 第1号集石及びピット
   (2) 第2号集石及びピット
   (3) 第3号集石及びピット
   (4) 第4号集石及びピット
   (5) 第5号集石及びピット
   (6) 第1号土壙
5. 出土遺物 …… 12
   (1) 貨　　銭
   (2) 第1号土壙出土遺物
   (3) 封土他出土遺物
6. ま と め …… 15
7. 中山5号塚発見の炭焼窯 …… 17
   (1) 第1号炭焼窯
   (2) 第2号炭焼窯

Ⅱ　座禅塚発掘調査報告

1. 発掘調査の経過 …… 20
2. 外部形態 …… 22
3. 土　　層 …… 22
4. 内部構造 …… 24
5. 出土遺物 …… 24
6. ま と め …… 26

図 版 目 次

図版第１図　中山５号塚遠景，中山５号塚近景
図版第２図　中山５号塚近景，中山５号塚発掘風景，第２号炭焼窯実測風景
図版第３図　中山５号塚貨銭出土状況
図版第４図　中山５号塚断面，中山５号塚第１号土壙，中山５号塚基底部遺構
図版第５図　中山５号塚第１～４号集石及びピット
図版第６図　中山５号塚出土貨銭
図版第７図　中山５号塚出土遺物
図版第８図　中山５号塚第１号炭焼窯，中山５号塚第２号炭焼窯
図版第９図　中山５号塚第２号炭焼窯
図版第10図　中山５号塚第２号炭焼窯
図版第11図　座禅塚遠景，座禅塚近景
図版第12図　座禅塚発掘風景，座禅塚遺物出土状態，座禅塚断面，座禅塚周溝，座禅塚基底部遺構
図版第13図　座禅塚基底部遺構
図版第14図　座禅塚出土遺物

挿 図 目 次

第１図　遺 跡 位 置 図……3
第２図　中山５号塚周辺の地形図……5
第３図　第１号集石実測図……6
第４図　中山５号塚全測図……7
第５図　中山５号塚断面図……折込み……8・9
第６図　基底部遺構及び貨銭出土位置図……9
第７図　第１号集石及びピット……10
第８図　第２号集石及びピット……10
第９図　第３号集石及びピット……10
第10図　第４号集石及びピット……11
第11図　第５号集石及びピット……11
第12図　第 １ 号 土 壙……11
第13図　中山５号塚出土貨銭……13
第14図　中山５号塚出土貨銭……14
第15図　第１号土壙出土遺物……14
第16図　第１号炭焼窯実測図……17
第17図　第２号炭焼窯実測図……18
第18図　第２号炭焼窯内部構造実測図……19
第19図　座禅塚周辺の地形図……21
第20図　座禅塚全測図……23
第21図　基 底 部 遺 構……24
第22図　座禅塚断面図……折込み……24・25
第23図　座禅塚出土遺物……25

表 目 次

第１表　中山５号塚封土層序観察表……8
第２表　貨 銭 一 覧 表……12

序　　説

1. 発掘調査に至る経過

長岡ニュータウンの建設構想が具体的に発表されたのは，昭和48年5月の西部丘陵開発計画においてである。この計画は新しい総合的な機能を持つ都市を長岡市の西部丘陵地帯に建設し，これにより隣接地域も含め開発整備するとともに，その刺激によって調和のとれた長岡市全体の発展を図ろうとする目的を持ったものである。

こうした地方中核都市への積極的な試みは全国的にも注視をあびるところとなり，新潟県並びに長岡市の要請により，昭和50年11月に国土庁長官および建設大臣から「長岡ニュータウン開発整備事業実施基本計画」の認可を受けて，地域振興整備公団の第一号事業としてスタートするに至った。

公団では事業の実施計画策定にあたり，自然環境および歴史環境と調和した開発計画を立案するため，植生，動物，文化財についての調査を市に依頼した。その後，更に詳細な資料を得るため公団は新潟県教育委員会に対し長岡ニュータウン区域内の埋蔵文化財包蔵地等の確認調査を要請した。

この要請を受けた県教育委員会は昭和51年度に長岡ニュータウン建設計画区域内の遺跡分布調査および遺跡確認調査を実施するという委託契約を公団と結んだ。これにより県教育委員会では昭和51年度に調査対象地区総面積1,000*ha*のうち520*ha*を分布調査し，その結果は「長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書〔1〕」としてまとめられた。この分布調査において，調査対象区域内に22箇所の遺跡が確認され，これらの遺跡の措置について公団，県教育委員会と市教育委員会の三者で数回にわたり協議が重ねられた。

その結果工事計画自体との関連から，現状保存が難しく，また工期との関連でも早急に取扱を決定しなければならない「中山5号塚」「座禅塚」「蛇山7号塚」の3遺跡について，昭和52年度中に発掘調査を実施し記録保存とすることに決定した。

これらの3遺跡の発掘調査について「蛇山7号塚」は新潟県，「中山5号塚」「座禅塚」は長岡市が実施することで，合意に達し，地域振興整備公団と新潟県及び長岡市の三者の間で覚書が交換された。

これにより市教育委員会は公団，県教育委員会と打合わせて，昭和52年7月15日付で地域振興整備公団長岡都市開発事務所長が委託者，長岡市長が受託者となり発掘調査に関する委託契約に調印した。　（本多昌治）

2. 遺跡周辺の環境

(1) 地理的環境　長岡市は新潟県のほぼ中央部に位置を占め，市内の中央部を北流する信濃川が山間部から平野部へと流れを転換する谷口扇状地に立地している。信濃川の周辺部には中越平野が広がり，市内東部地域は東山丘陵から魚沼連峰へとのび，西部地域は津南・十日町地区において発達した信濃川河岸段丘の北端部である関原台地から西山丘陵を経て東頸城丘陵へと続いている。その東頸城丘陵は越後第3紀丘陵に属する褶曲地帯であり，西山丘陵，曽地丘陵，八石丘陵，開田丘陵がそこに端を発して南西～北東方向に走り，背斜構造地形を形成している。それらの丘陵間の向斜構造部分には中級河川の島崎川，黒川，渋海川が流れ，信濃川に合流する。

中山5号塚の所在する黒川右岸地域は八石丘陵北部と関原台地に二分される。八石丘陵北部には笹川，谷川をはじめ黒川に合流する多くの小河川が存在し，高頭町の谷，杉の高地の沢等の小谷をつくりだしている。これらの小谷によって八石丘陵北側は小ブロックに分割されるが，中山5号塚は杉の高地の沢と笹川の谷に東西をはさまれた丘陵線上から東側へ向かってのび，水田からの比高差約5*m*の舌状丘陵最先端部に立地している。座禅塚の位置する黒川左岸地域は曽地丘陵と三島台地からなっている。曽地丘陵は丘陵の南側を流れる黒川に向けて無数の小谷を開折させており，その小谷は多岐の舌状丘陵を作り出している。座禅塚も宮本三丁目（岩野地区）西端の標高約87*m*を測り，眺望のきく舌状丘陵先端部に立地している。なお，南側斜面は深く彎入する寺田の沢により急峻な勾配をなし，西は尾根線を経て岩野城址に連する。

このように中山5号塚及び座禅塚には舌状丘陵先端部に立地するという共通性を見い出せる。しかし，前者は支流である笹川へ，後者は広い展望が可能である本流の黒川に向かって突出しているという相違点が認められる。

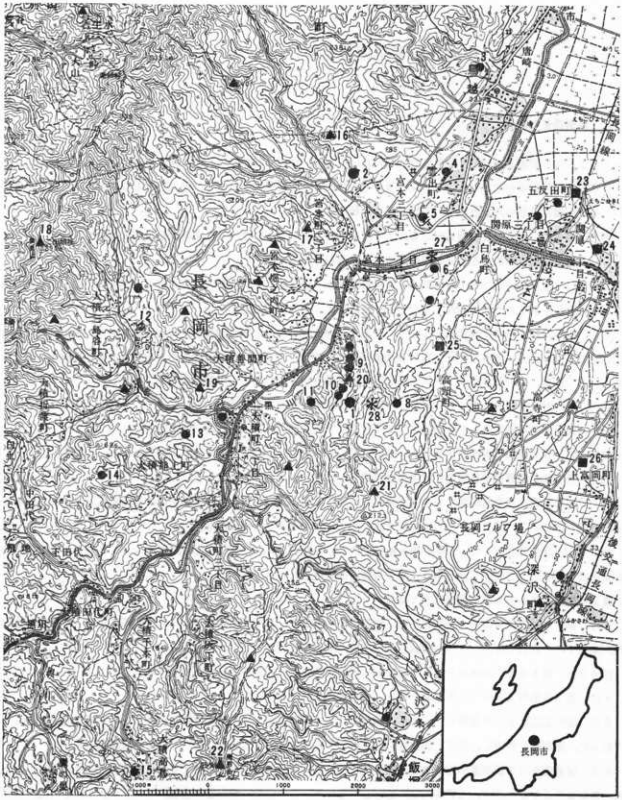
(2) 歴史的環境　中山5号塚（第1図1）と座禅塚（第1図2）が所在する長岡市宮本地内及びその周辺地域は，律令時代では越後国古志郡に属し，中近世においては白鳥荘と呼称され，古くから開発の進んだ地域であった。

この地域における中近世の遺跡は第1図の如くで，塚，山城，館，寺院址の4種類に分類することができ，西田大塚（第1図5），中之坊経塚（第1図6），三島谷城址（第1図18），桝形城址（第1図22），関原館（第1図23），中之坊寺院址（第1図27）など総数で49箇所を数える。数のうえでは塚が23箇所と最も多く，次いで山城の20箇所，館の4箇所，寺院址の2箇所の順になっている。

各遺跡ごとの分布，立地状態をみてみると，塚の多くは黒川沿いの集落付近の小高い舌状丘陵上に立地するものがほとんどである。例えば，いなまんき1～4号塚（第1図15）は大積高島町，三島谷金塚（第1図12）は大積三島谷町，蛇山10号塚（第1図8）は高頭町，座禅塚（第1図2）は岩野地区に接している。山城は標高約100～300*m*の比較的大きな尾根線上に点在しており，特に三島谷城址（二田城址）を中心とした黒川左岸地域では各主要尾根線上に山城が確認でき，その分布密度はきわめて高くなっている。また，山城の多くは桝形城址といなまんき塚1～4号，片刈城址（第1図21）と蛇山10号塚，三島谷城址と三島谷金塚，岩野城址（第1図16）と座禅塚のように附近に塚を伴う類例が多く認められる。

このように山城，塚，集落はそれぞれ単独で存在するが，桝形城―いなまんき1～4号塚―大積高島町，片刈城―蛇山10号―高頭町，三島谷城址―三島谷金塚―大積三島谷町，岩野城址―座禅塚―岩野地区のように，山城，塚，集落といったグループの中に有機的なつながりをもっていたものと思われる。そして，中世社会においては山城は防衛，塚は供養又は埋葬，集落は日常生活という機能をもち，一つの生活領域を形成していたのではないかと推察される。

なお，館及び寺院址はある程度の平坦面を必要とするためか，なだらかな関原丘陵の縁辺部に集中的に分布しており，丘陵上に存在する塚・山城とは対照的な立地を示している。　（寺崎裕助）



第1図 遺 跡 位 置 （長岡・柏崎）

1. 中山5号塚　2. 座摩塚　3. 寄 塚　4. 火振り坂経塚　5. 西田の大塚　6. 中之坊の経塚　7. 地蔵塚　8. 蛇山10号塚　9. 中 山1.2号塚　10. 中 山3.4号塚　11. 薬師堂の塚　12. 三島谷の金塚　13. 熊上B塚群　14. 熊上A塚群　15. いなまんき塚　16. 岩野城　17. 五庵谷城　18. 三島谷城　19. 三丁目城　20. 丸山城　21. 片刈城　22. 桝形城　23. 関原館　24. 除 城　25. 城扣館　26. 藤橋遺跡第二地点　27. 中之坊寺院址　28. 寺屋敷

Ⅰ　中山５号塚発掘調査報告

1.　発掘調査の経過

中山５号塚の発掘調査は昭和52年８月25日からはじまり，10月６日に終了した。次は発掘調査の日誌抄である。

８月25日　現場事務所から中山５号塚に至る道の草刈り及び塚周辺を整備し，塚の近景を写真撮影する。午後から，塚の西側に認意の点を設置し，平板測量を開始する。

26日　調査員，作業員及び調査関係者により作業の打合せをし，引きつづき平板測量及び調査杭を打つ。

27日　発掘調査を開始する。塚の墳頂部で第１号葺石が発見される。

９月１日　墳頂部周辺の第１号葺石の全体が検出され，清掃し，写真撮影・実測を行う。実測終了後，石を取り除き石に墨書銘があるか否かを確認する。一字一石経のような墨書銘はなかった。

２日　塚の西側の周溝に遺体がかかっている第１号炭焼窯の発掘も塚の調査と平行して開始する。塚の基盤となる地山層の上面の認定が困難なため，塚の東西線に沿った西寄りの位置に１*m*×50*cm*のトレンチを設け，封土を掘り下げる。この結果，地山層は粘土ブロックが混在する黄褐色土層と判断し，作業を進めることにした。

７日　塚の封土を利用してつくられていた第２号炭焼窯の発掘を開始する。

12日　封土中や基底部直上から開通元宝・永楽通宝等の貨銭が出土し始める（図版第３図）。

17日　第２号炭焼窯の実測をするため，木杭などで簡易やりかたを組み，平面実測を開始する。（図版第２図）。

20日　県文化行政課金子拓男文化財主事を招請し，調査における指導助言を受ける。

24日　塚の発掘状況や基底部などの写真撮影のために，塚の南側にある松の木の上にやぐらを組むことにし，ハシゴをつくりはじめる。26日にやぐらが完成する。地上よりの高さ約11*m*である。

28日　塚の墳頂部に残っていた杉の根を輪切りにし，年輪を数える。新芽で約110年±５年であった。塚の封土の断面を縮尺20分の１で実測しはじめる。第１号集石が検出される。

第２号炭焼窯にかかる現場調査は全て終る。

30日　第Ⅰ号～第３号集石の実測を行い，集石を取りはずす。石に墨書銘はなかった。集石下にピットが発見され，発掘する。集石及びピットから貨銭が出土する（図版第３図）。

10月３日　第４号集石が検出され，写真撮影・実測を行う。集石中から貨銭が出土する。

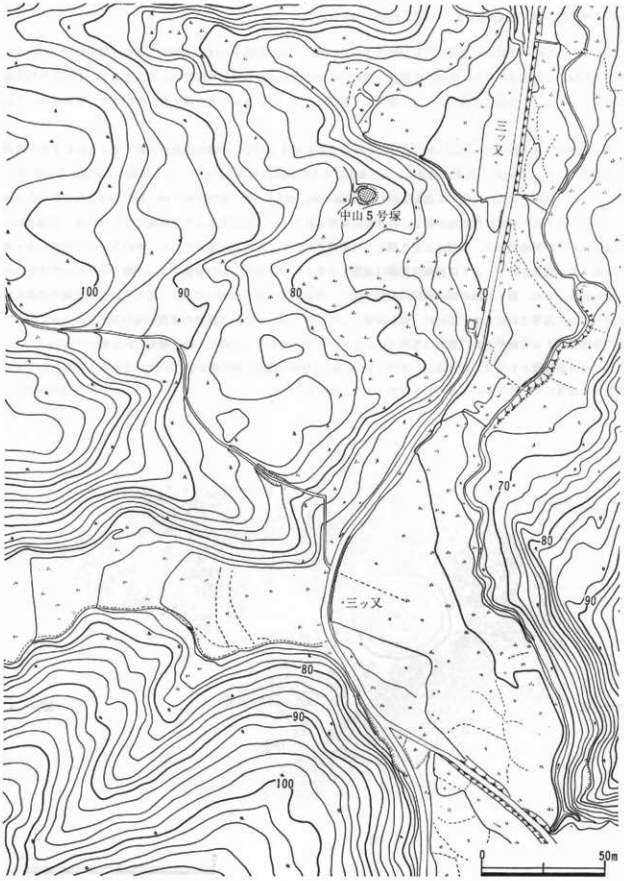
４日　第５号集石及びピットが発見される。貨銭等の遺物はなかった。

５日　塚の基底部までの発掘が完了する。基底部にある遺構は第１号～第５号集石及びピットと第１号土壙の６基であった。基底部を整理し，塚の完掘状態の写真をやぐらから撮影する。基底部の平面を平板測量する。

６日　塚基底部の平板測量が完了する。県文化行政課金子文化財主事の助言により，塚の基底部面を確認するため，再度東西線を掘り下げ，地質専門家に鑑定してもらう。この結果，地山層の上部がブロック状になるのは，浸透した地下水が氷結し，乾燥するためにヒビ割れが生じるためであり，前に地山層と判断していた面でよいことがわかった。

これによって現地における塚の調査は全て終了する。

（駒形敏朗）



第2図 中山5号塚周辺の地形図

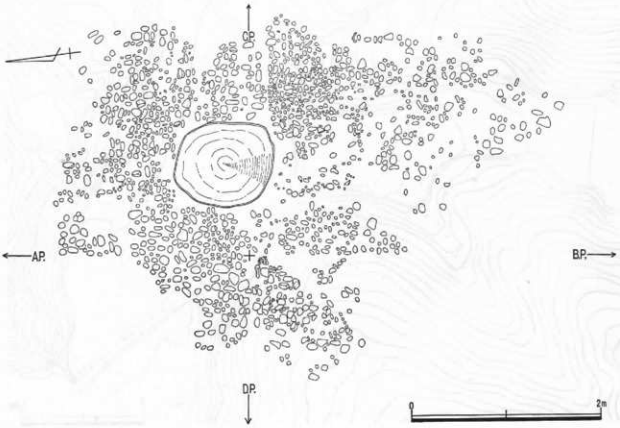
2. 外 部 形 態（図版第1図・図版第2図上，第2～4図）

八石山一塚山峠一桝形山と連なる八石丘陵はさらに，北へ三本の稜線をのばして関原方面の沖積面に続いている。中山5号塚はこの稜線のうち，西側に位置する稜線の途中の大菩薩から笹川の沢に向って突き出ている尾根の先端部に位置している。この周辺は地滑りが多く発生した箇所で，沢をはさんだ北・南・東の斜面にその痕跡が残っている。

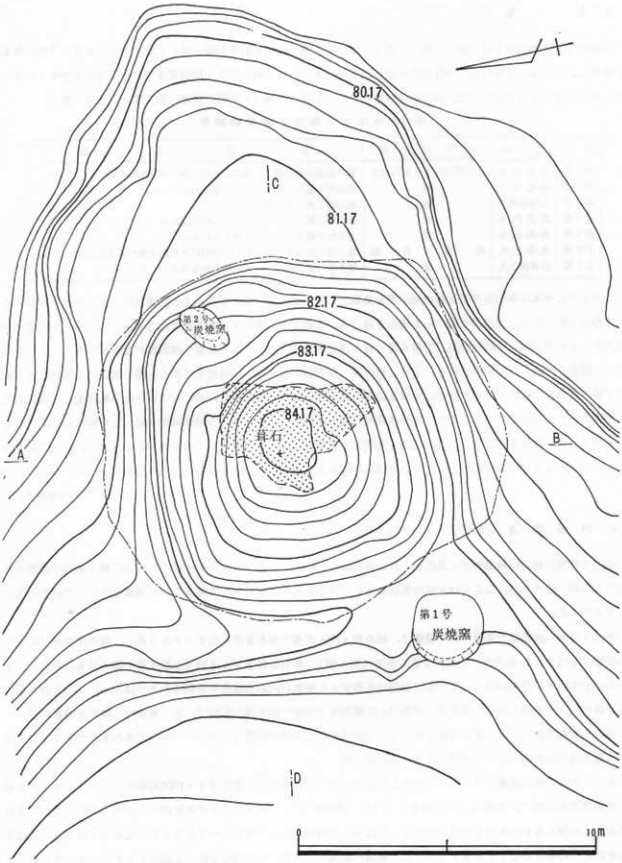
中山5号塚は東西12m×南北12.5m，高さ2.8mの方形を呈する塚で，西側に尾根を切断するようにU字形の周溝が残存していた（第4図）。周溝は調査によって東側にもその痕跡が発見されたが，北・南側には周溝がなく斜面となっていた。周溝の規模は西側で天端幅2.6m，底面幅1m，深さ1.5m，東側で幅1m，深さ50cmである。中山5号塚の周辺一東・西・南には平坦地があり，杉林等に利用されていた。地元民はこの平坦地について，東と南側は杉の植林のための平坦地であり，西側はぶどう畑として利用されたことがあると言っていた。中山5号塚で周溝が西・東の2面でしか発見されず，とくに東側の周溝は規模も小さく，構築後何らかの要素によって削平されたのではないかと思われる。また，南・北側の塚の斜面は勾配が強く，南側は平坦地につづいている。恐らく，南・北側の周溝も植林等のために削平されたものと思われ，塚を構築した時には西側にみられる規模の周溝が塚の周囲をめぐっており，その後開墾によって削平され，東側の周溝だけがわずかにその痕跡をとどめたものと考えられが確かではない。

この他外部施設としては，塚の頂部に東西3.5m×南北5.5mの範囲に礫が敷かれていた。この第1号茸石はこぶし大あるいは悌に人頭大の礫によって形成されていた（第3図）。

（駒形敏朗）



第3図 第 1 号 茸 石 実 測 図



第4図 中山5号塚全測図

3. 土　　層

本塚の土層状態は第5図の如くであり，表土を除いて，地山層（魚沼層群第2層）上面にピットを伴う5基の集石を構築し，その上に7層の封土を版築状に盛ったものである。地山層上面から墳頂部までの土厚は約1.2mを測り，第1層から第7層までは盛土で，他は自然堆積層と考えられる。第1～7層の詳細は第1表のとおりである。

第1表　中山5号塚封土層序観察表

層位	色調	出土遺物等	堆積状態
第1層	黒褐色土	墳頂部付近より葺石出土	塚の表面全体を覆い，塚周辺の表土層と判別がつかない。
第2層	黄褐色土	無	地山層を盛土した封土で，推積が最も厚い。
第3層	黄黒褐色土	無	地山層と表土層が混在している。
第4層	暗黄色土	無	第3層に類似しているが，表土層の混入が目立つ。
第5層	暗褐色土	無	表土層を盛土した封土と考えられる。
第6層	黄黒色土	集石・貨銭	地山層が主体を占めるが，部分的に灰色粘土塊の混入が認められる。
第7層	暗黄褐色土	無	第6層に類似するが，細い炭化物を含んでいる。

このように本塚は魚沼層群第2層の地山層を基盤として，第1層～第7層の封土と周溝及びピットを伴う集石によって構成されており，①周溝を巡ぐらし墳丘を設ける。②地山層上面にピットを穿つ。③ピット上に集石を設置。④集石及びその周辺部に貨銭を埋納。⑤第6層～第1層を版築状に盛土。⑥第1層の墳頂部付近を石で葺く。という順序にて構築されたものと推測される。なお，地山層（魚沼層群第2層）は風化土である上層の黄色土と未風化土である下層の灰色粘土層に2分されるが，本塚及びその周辺部における地山層中においては黄色土（風化土）と灰色粘土（未風化土）が混在している。この土層推積状況は過去において地すべり等の崩壊運動が起った可能性をうかがわせるものであり，分離丘の存在，付近の尾根と比較して等高線の大きな乱れ等がその根拠としてあげられる。これらのことから中山5号塚は崩壊地形上にできた分離丘を利用して造営された塚ではなかろうかと推定される。

（寺崎裕助）

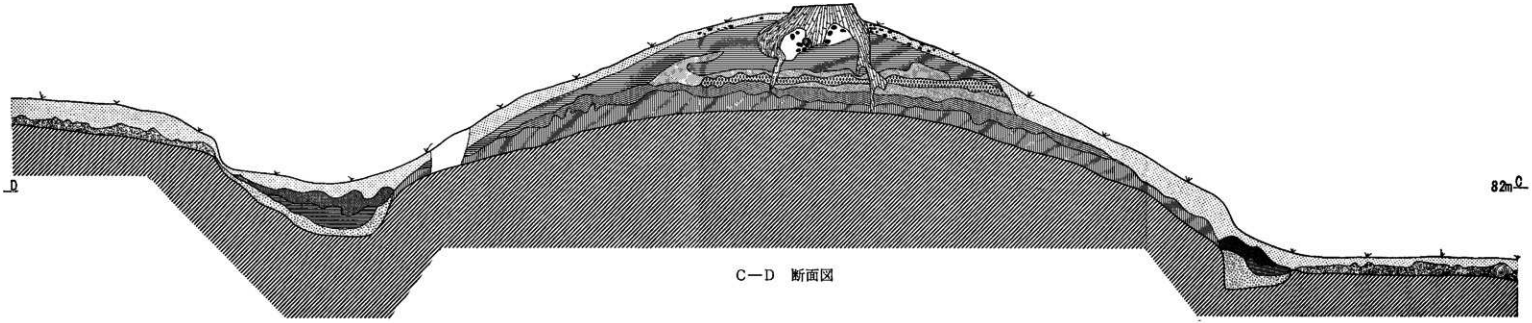
4. 内部構造（図版第4・5図，第6図）

中山5号塚が地山の黄褐色土と黒色土それに黄褐色土と黒色土が入りまじった土砂とを交互に積み重ねて構築されたことは前に述べたが，ここでは本塚の基底部もしくは基底部の直上において発見された遺構等について説明を加えることにする。

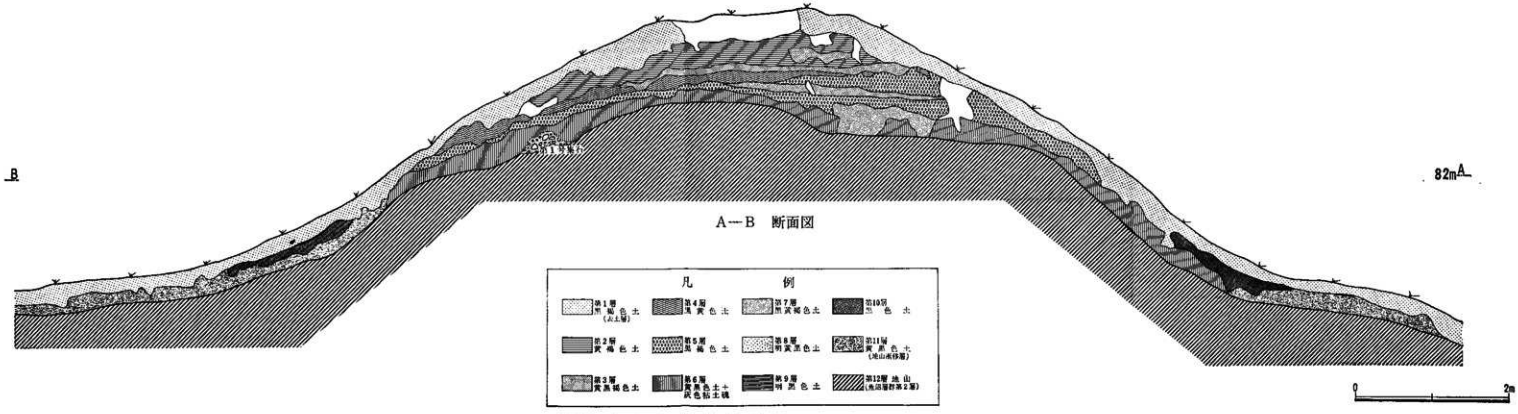
中山5号塚の基底部で発見された遺構は，塚の南・西・北側で集石を伴ったピットが5基と，塚の中央部で北寄りの位置で発見された長方形の土壙が1基である（第6図）。集石を伴うピットのうち第1号～第4号集石及びピットからは北宋銭等の貨銭が出土している。貨銭は直接ピットや集石内から出土する例ばかりではなく，3～6枚もしくは単独で出土する例もある。第6図の貨銭出土位置番号6～10・12・16がそれで，塚の東側一丘陵の先端部に近いところから発見されている。直接遺構を伴わないで発見された貨銭の位置は基底部から5cm内外の上位である。貨銭出土位置番号13は周溝内からの発見である（図版第3図）。

ピットや集石等の遺構を伴わないで出土した貨銭のうち，貨銭出土位置番号9・10は杉板の上にのって3～4枚重って発見された例で，杉板は互いに接触していた（図版第3図）。おそらく1枚の杉板の上にのっていたものと思われる。この他にも6～8は1ケ所にかたまって出土した例で，ひとつのグループをなしていたものであろう。12は3枚をひとつの単位としてまとまっていたし，東側の周溝から発見された13も5枚が1組みとしてまとまっていた。これらの例はピットや集石を伴わないが，遺構内出土例と同じく，それぞれがひとつのグループをなしていたものと思われる。

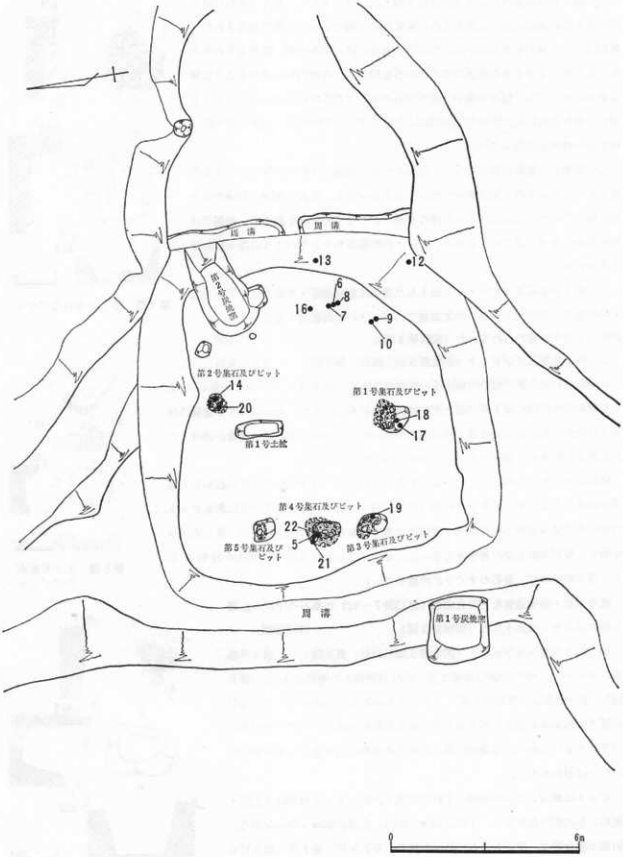
（駒形敏朗）



C—D　断面図



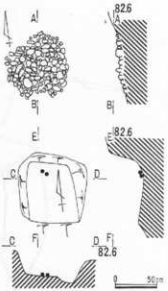
第5図　中　山　5　号　塚　断　面　図（白抜きは攪乱層・黒点は礫）



第6図　基底部遺構及び貨幾出土位置図

(1) 第1号集石及びピット（図版第5図上段，第7図）　第1号集石は第5図のA・B断面図に見られるように，基底部の南側によった位置で発見された。集石は3～4㎝の小さな石から，こぶし大あるいは人頭大の礫，扁平なものから丸いものまでさまざまな形態や大きさの石を用いて，ほぼ円形を呈するように積み重ねられている。第1号集石は他の集石に比して密集度が高く，ほとんどすき間なく積み重ねられ，厚さも第5図にみられるように20㎝を測り，第2号～第5号集石の様相とは異っていた。

この密集した集石を取り除くと，集石から少し南側にずれて方形のピットが発見された。ピットの上面は80㎝×80㎝の正方形を呈し，底面は50㎝×73㎝の長方形を呈していた。これはピットの深度が深いところで約30㎝を測るが，南側では塚の斜面と底面が同じになるため，ピットの形態がちりとりのようになったためと思われる。

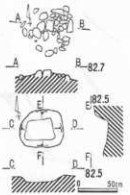


第7図　第1号集石及びピット

この第1号集石及びピットから出土した遺物は皇宋通宝・熙寧元宝・元祐通宝・紹聖通宝（第13図1～6）の北宋銭で，ピットの北側底面で発見された。この貨銭は3枚ずつ重ねられていた（図版第3図）。　（駒形敏朗）

(2) 第2号集石及びピット（図版第5図二段目，第8図）　第2号集石及びピットが発見された位置は塚の北側斜面の基底部である（第6図）。この第2号集石のある北側斜面には他に第1号土壙と第2号炭焼窯があるのみで，他に類似する遺構は発見されなかった。あるいは第2号炭焼窯が築かれたために，集石等の遺構が消滅したとも考えられるが，確認する手だては何も残っていなかった。

集石は中心から南側にかけて一部を欠落していたが，ほぼ円形に小さい石から人頭大の石までさまざまの大きさや形態の石を配列している。集石はすぐ下にあるピットの中にまで積み重ねられており，密集度は第1号集石にはおよばないが，厚さ約15㎝を測り，集石中第2位の密集度であった。ピットは上面が方形で，底面が台形を呈し，深さ約6㎝で，集石のすぐ下に位置していた。

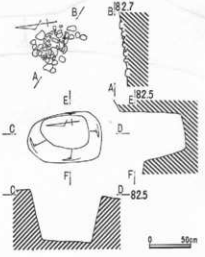


第8図　第2号集石及びピット

威平元宝・皇宋通宝などの北宋銭（第13図7～12）が集石の中位の位置で石にはさまって出土した（図版第3図）。　（駒形敏朗）

(3) 第3号集石及びピット（図版第5図三段目，第9図）　第3号集石とピットは，塚の西側の周溝に近い塚の基底部から発見された（第6図）。第3号集石は密集度が高く，ピットの中にも入り込んでいた。集石の厚さは約20㎝を測る。石は第1号・第2号集石と同じく大きさや形態にバラエティーがあり，意識的に同じ大きさや形態の石を選んで積み重ねていたとは思われない。

集石はやや南側にずれて発見された。ピットの平面は上面・底面ともに楕円形を呈し，上面は90㎝×60㎝，底面は60㎝×40㎝を測る。断面は逆台形で，深いところで75㎝を測り，集石を伴う第1号～第5号ピットの中では最も深かった。



第9図　第3号集石及びピット

遺物はピットの覆土中から淳化元宝・天禧通宝・天慶元宝などの北宋銭や遼銭（第13図16～21）が3枚づつ重なって出土した（図版第3図）。　（駒形敏朗）

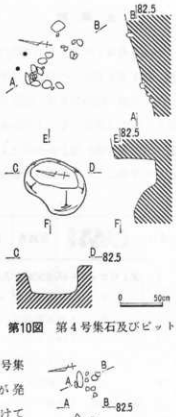
(4)　第4号集石及びピット（図版第5図下，第10図）　第4号集石は第1号～第3号集石にくらべれば集石と呼称するには抵抗があるが，一定の範囲に石がおかれており，下にピットを伴っているところから，第1号集石などと同じ性格をもつものとして，その範疇に入れた。

第4号集石は第3号・第5号集石と同じく西側の周溝に近い墓底部に20個以上の石がおかれていた（第6図）。石の大きさはこぶし大から人頭大のものが多く，これらの石がおかれた間に小さい石が並んでいた。

ピットは集石のほぼ真下の位置で，塚の墓底部―地山面を掘りこんでいた。ピットの上面は西に広がり，底面は東側にほぼ垂直に掘りこまれており60cm×30cmの楕円形を呈していた。

遺物は開通元宝・紹聖元宝・政和通宝（第13図22・23）が集石の北側の墓底部から出土し，集石の直上の封土中に開通元宝（第14図42）が出土した。

（駒形敏朗）

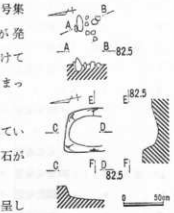


第10図　第4号集石及びピット

(5)　第5号集石及びピット（第11図）　第5号集石及びピットは第3号・第4号集石及びピットと並んで塚の西側の墓底部から発見された（第6図）。第5号ピットが発見された位置は調査中において塚の墓底部―地山面を確認するためにトレンチを設けて地山面を約1*m*以上掘り下げた箇所であり，そのためにピットの南側が欠落してしまっている。これは調査者のミスに他ならないことをおわびしておく。

集石は第4号集石と同じく密集度が低く，9個の石が平面的に墓底部上におかれているにすぎない。石の大きさは第4号と同じく人頭大のものが中心的で，こぶし大の石が並べられている。集石はピットの北側の上面におかれていた。

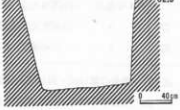
ピットは残存部分で上面が55cm，底面が40cmの方形で，断面は深さ20cmの皿状を呈していた。貨銭等の遺物は出土しなかった。　（駒形敏朗）



第11図　第5号集石及びピット

(6)　第1号土壙（図版第4図，第12図）　本土壙は塚の中心部よりやや北東側に位置し，地山層に深く掘り込まれたかたちで検出された。形態は長方形を呈し，開口部の長辺約150cm，短辺約50cm，底部の長辺約110cm，短辺約40cm，地山層上面からの深さ約120cm～140cmの規模をもっている。長軸方向はほぼ北を向き，等高線と直交する形で谷筋に面している。堆積土層は第7層と類似しているがやや黒色を帯びかたくしまり，集石下のピット内の土層とは異なっている。出土遺物も磨石1点とフレーク2点だけで集石中等認められた貨銭は出土していない。このように第1号土壙はピットを伴う五基の集石とは異なった特徴を有し，その規模，長方形を呈する形態，等高線と直交する長軸線，縄文時代の遺物を出土したという点から類推して，北海道～中部地方一帯にかけて分布する縄文時代の土壙の可能性がうかがえる。

（寺崎裕助）



第12図　第1号土壙

5. 出 土 遺 物

中山5号塚から出土した遺物は塚の基底部直上もしくは基底部遺構内などからの貨銭が最も多く48点を数え，その他，第1号土壙からの磨石などや，封土中から縄文土器片が1点，塚周辺から陶・磁器片が2点出土している。

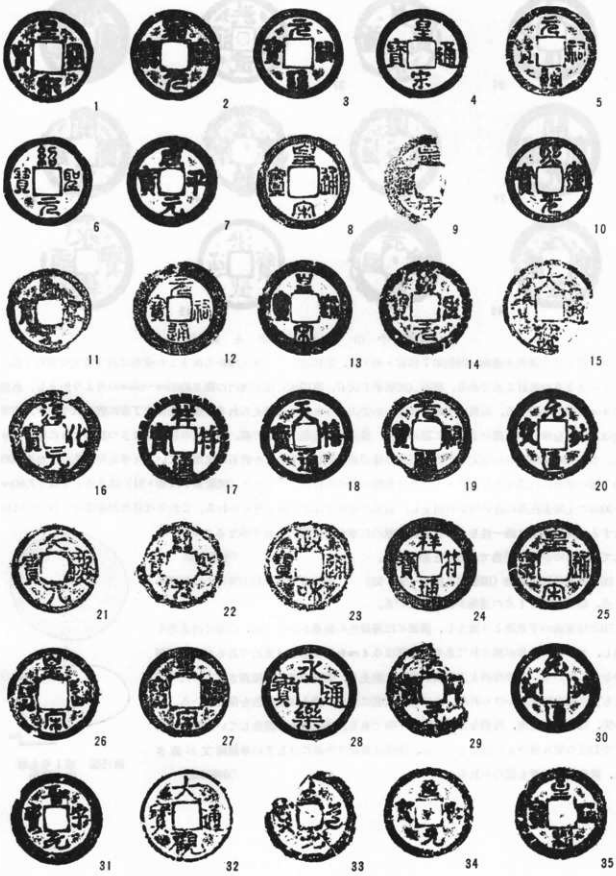
(1) 貨銭（図版第6図，図版第7図36～46，第13図，第14図）　貨銭は開通元宝・皇宋通宝など中国からの渡来銭や，区別は定かでないがそれを模倣した「ビタ銭」と呼ばれる私鋳銭が集石やピットの中から出土したり，杉板の上（図版第3図）などから出土している。第13図29図～35は杉板の上にのった状態で発見されたもので，貨銭の銅イオンの作用によって杉板の一部分が残ったものと思われる。

第2表　貨　銭　一　覧　表

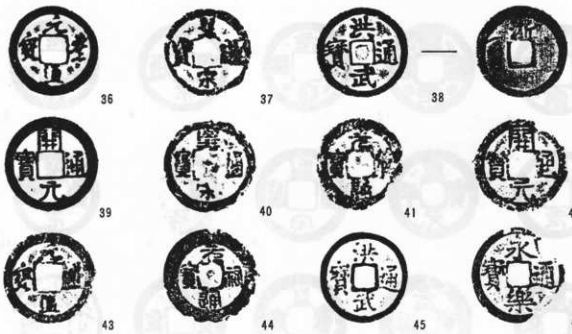
番号	出土遺構名及び位置番号	貨銭名	鋳造国・年号	西暦	番号	出土遺構名及び位置番号	貨銭名	鋳造国・年号	西暦
1	第1号ピット・17	皇宋通宝	北宋・宝元2年	1039	24	周　溝　・13	祥符通宝	北宋・大中祥符元年	1008
2	〃　・〃	熙寧元宝	〃・熙寧元年	1068	25	〃　・〃	皇宋通宝	〃・宝元2年	1039
3	〃　・〃	元祐通宝	〃・元祐元年	1086	26	〃　・〃	〃	〃・〃	〃
4	〃　・18	皇宋通宝	〃・宝元2年	1039	27	〃　・〃	〃	〃・〃	〃
5	〃　・〃	元祐通宝	〃・元祐元年	1086	28	〃　・〃	永楽通宝	明・永楽6年	1408
6	〃　・〃	紹聖元宝	〃・紹聖元年	1094	29	杉板の上　・9	咸平元宝	北宋・咸平元年	998
7	第2号集石　・14	咸平元宝	〃・咸平元年	998	30	〃　・〃	元祐通宝	〃・元祐元年	1086
8	〃　・〃	皇宋通宝	〃・宝元2年	1039	31	〃　・〃	聖宋元宝	〃・建中清国元年	1101
9	〃　・〃	〃	〃・〃	〃	32	〃　・〃	大観通宝	〃・大観元年	1107
10	〃　・〃	熙寧元宝	〃・熙寧元年	1068	33	〃　・10	至道元宝	〃・至道元年	995
11	〃　・〃	〃	〃・〃	〃	34	〃　・〃	至和元宝	〃・至和元年	1054
12	〃　・〃	元祐通宝	〃・元祐元年	1086	35	〃　・〃	至和通宝	〃・〃	〃
13	第2号ピット・20	皇宋通宝	〃・宝元2年	1039	36	基底部直上　・8	元豊通宝	〃・元豊元年	1078
14	〃　・〃	紹聖元宝	〃・紹聖元年	1094	37	〃　・〃	皇宋通宝	〃・宝元2年	1039
15	〃　・〃	大観通宝	〃・大観元年	1107	38	〃　・〃	洪武通宝	明・洪武元年	1368
16	第3号ピット・19	淳化元宝	〃・淳化元年	990		〃　・〃	欠損品		
17	〃　・〃	祥符通宝	〃・大中祥符元年	1008	39	〃　・12	開通元宝	唐・武徳4年	621
18	〃　・〃	天禧通宝	〃・天禧年間	1017～22	40	〃　・〃	皇宋通宝	北宋・宝元2年	1039
19	〃　・〃	元祐通宝	〃・元祐元年	1086	41	〃　・〃	元祐通宝	〃・元祐元年	1089
20	〃　・〃	〃	〃・〃	〃	42	第4号集石上・5	開通元宝	唐・武徳4年	621
21	〃　・〃	天慶元宝	遼・天慶年間	1111～21	43	基底部直上　・6	元祐通宝	北宋・元祐元年	1086
	第4号集石　・21	開通元宝	唐・武徳4年	621	44	〃　・7	〃	〃・〃	〃
22	〃　・22	紹聖元宝	北宋・紹聖元年	1094	45	〃　・16	洪武通宝	明・洪武元年	1368
23	〃　・〃	政和通宝	〃・政和元年	1111	46	封　土　中	永楽通宝	〃・永楽6年	1408

註 1. 番号は第13図・第14図及び図版第6図・図版第7図の拓影及び写真番号である。

2. 位置番号は第6図の貨銭出土位置番号である。



第13図 中 山 5 号 塚 出 土 貨 銭



第14図　中　山　5　号　塚　出　土　貨　銭

(2)　第１号土壙出土遺物（図版第７図47・49・51，第15図）　本土壙から出土した遺物は縄文時代の磨石１点，フレーク２点の合計３点である。磨石（図版第７図47，第15図）は土壙内の深さ約50㎝～60㎝の所より出土し，直径約９㎝の円形を呈する。石質は明確ではないが安山岩であろうと考えられる。表面全体は丁寧に磨かれており，使用痕は縁辺部全体と中心部の２か所に認められ，縁辺部の使用痕は敲打痕，中心部の使用痕はさつ痕のように観察できる。これらの使用痕から推定してこの石器は縁辺部を敲石，中心部を磨石に使用していたと考えられる。また表面の約７割の部分には黒光りしたタール状の付着物が認められる。フレーク（図版第７図49・51）は２点とも深さ約80㎝～90㎝の土壙基底部に近い所から出土し，石質は頁岩ではないかと考えられる。これらは自然剥離部分においては接合するが使用痕又は画一性をもった石材剥離の打撃痕等は認められず単なるフレークとして考えるのがより妥当であろうと思われる。　（寺崎裕助）

(3)　封土他出土遺物（図版第７図48・50・52）　中山５号塚の封土等からは陶器片２点，縄文土器片１点の遺物が出土している。

50は塚東側の平坦地より出土し，表面には薄緑色の釉薬がかけられ，内面は暗赤色を呈し，ヨコナデ整形が施されてある。器厚は0.4㎝を測り胎土は黒色であるが白色の細砂を含んでいる。52は塚西上方の傾斜地より出土し，茶碗の破片と推測される。内外面とも黄灰色の釉薬がかけられ細いひび割が縦横に走り，胎土は黄灰色を呈している。なお50，52とも製産地，時期などの詳細は不明である。48は封土に混在していた縄文土器片でD区の第６層中より出土している。焼成は良好で外面にはＬＲの単節縄文が施され，炭化物の付着も認められる。　（寺崎裕助）

第15図　第１号土壙出土遺物

6. ま と め

中山５号塚は笹川の沢を前面に望む尾根の先端部に位置し，背後の山稜には中山１号～４号塚・丸山城址が所在し，笹川の沢をはさんだ向いには片刈城址が所在している。このような環境の中にある本塚は一辺約12m，高さ2.8mの方形塚で，東西に周溝が残存し，周辺地域にある塚よりは規模が大きく，特異な塚である。本塚の周囲一特に東西の尾根線上には平坦部が広がっている。この平坦部について金子拓男氏は塚の盛土採集地あるいは祭場の跡とも考えられ，周辺部を含んだ発掘調査の必要性を分布調査の報告書[註1]の中でふれられている。

中山５号塚の発掘調査は金子氏が指摘された点，塚の規模が大きいことをふまえて，塚本体を含めて周辺部も全て発掘することを原則として調査していった。この調査で明らかになったことはこれまでにも述べてきたが，ここで改めて簡単にまとめてみたい。

- 塚の形態は方形で，東西に周溝が残存していたが，南北の沢に接する位置は削平されており，かつて周溝が存在したのか否かの判断はつかなかった。
- 塚の墳頂部に東西3.5m×南北5.5mの範囲に石が葺かれていた（第１号葺石）。
- 塚の封土は黒色を呈する腐植土と黄褐色の地山一魚沼層群第２層を交互に積んでいた。
- 塚の東側基底部直上から開通元宝・皇宋通宝などの渡来銭が出土した。単独出土のものもあるが，３～６枚を１組として出土した例もある。中には杉板上の出土例もある。
- 塚の南・西・北側の基底部上面に集石を伴ったピット（第１号～第５号集石及びピット）が検出され，第５号を除いては集石やピット内から貨銭が出土している。
- 出土貨銭から中山５号塚の構築年代の上限は15世紀初めと思われる。
- 塚の北側に縄文時代の所産とみられる第１号土壙が検出された。
- 金子氏が調査の必要性を指摘された平坦地に柱穴等の遺構は発見されなかった。

これらの事実にもとづいて次に中山５号塚の構築の手順などをさぐってみたい。

① 馬の背状になっている尾根を台形に削平し，塚の基壇を造り出す。

中山５号塚の封土断面を観察すると旧表土の腐植土がなく，旧表土をそのまま利用したとは考えにくく，旧表土をも含めて地山面まで削平して塚の基底部を造り出したと思われる。この段階で周溝を掘ったのかは明らかではない。周溝を掘れば残土が出る，その残土の処置はどうするのかが問題となってくる。周溝の残土については後でふれるとして，次の段階を考えてみよう。

② 塚の基底部に方形のピットを設け，ピットの上面に石を積みあげる（第１号～第５号ピット及び集石）。この時貨銭をいっしょに埋納する。

塚の基底部からピットや集石の他に貨銭が数枚もしくは単独で出土している。遺構は基底部の西半分にあり，貨銭だけが出土した位置は東半分であり，基底部の周縁をめぐっている。この基底部に設けられたピット内からは遺体及人骨等を示す資料は検出されなかったが，貨銭が６枚１組となって出土した第１号ピットの例などは，「六道銭」の風習を示すものと思われ，死者あるいは火葬骨等を埋葬した可能性がきわめて強いと考えられる。また，遺構外出土の貨銭も杉板上出土例からみて，６枚１組の貨銭があり，封土内に何らかの施設を設けて死者を葬ったのか，あるいは道銭として木箱等に入れて埋納したのか，それを積極的に示す資料は杉板だけしか発見されなかった。

このように考えてくると，特にピット内には死者を埋葬し，その上に石を集めて葺石とし，六道銭を入れて死者を弔ったものと思われる。

③ 土盛りをし，墳頂部に石を葺いて完成させる。

ここで問題となるのは盛土をどこで求めたかであろう。前にも述べたが，金子氏は塚の周囲にある平坦部が盛土採集地でないかと指摘されていた。平坦地は現在，杉の植林地として利用されており，平坦地が塚の盛土を求めた痕跡か，植林のために削平されたのかを決することはできないと思われる。塚の東側の周溝は先端部側の斜面が西側の周溝に比べて著しく低く，塚がつくられたのちに人工の手が加わったものと思われ，平坦地が盛土採集地であったのか否かはいまとなってみれば考えらず，その可能性があったとだけ述べておきたい。それでは塚の盛土をどこから求めたのかが改めて問題となろう。ひとつには前に述べた周溝の残土がそれと思われる。西側の周溝の規模は天端幅2.6m，底面幅1m，深さ1.5mで，ここから出る土砂量はかなりの量になると思われ，第1位に周溝の残土を用いて土盛りをしたと考えられる。そして，盛土をするこの段階で周溝を掘ったのではないかと思われる。

以上のように中山5号塚の構築段階を考えてみると，死者を葬った供養塚の要素がきわめて強いと思われる。これは第1号～第5号集石及びピットの状況や，貨銭が「六道銭」の風習を示すような状態で出土していることなどから考えられるものであるが，人骨等が検出されない現状では，それを強く主張することはできない。

そこで，県内の調査例をみると，骨蔵器が出土した例は多いが，中山5号塚のように墓底部にピットを設け，その上面を石で葺くといった例は聞かない。ただ，西蒲原郡黒埼町大墓で直径30～35cm，深度10～15cmのピット内に人骨が埋葬されていた例がある。[註2] 大墓は江戸時代初期と推察される集団墓地的な要素を備えているもので，埋納穴群の上面に人骨が埋められた骨蔵器が出土している。人骨の有無はともかくとして，大墓の埋納穴は中山5号塚の墓底部に発見された集石及びピットに近いものと思われ，本塚も集団墓地とみることができるのではないか。

また，形態等から塚を分類されているのに金子拓男氏の研究がある。[註3] 金子氏は十日町市川治百塚の調査報告書の中で，真言密教の「六大体大説」と塚の形態との関係を追求され，地大塚・風大塚などに分類されている。本塚は金子氏が提唱された分類によれば「地大塚」に相当すると思われるが，封土が黒色土及び黄褐色土との混合で，「顕色の黄」とは少し異なると思われる。

このように他遺跡との比較や研究を通じて本塚をみてくると，中山5号塚は金子氏の「地大塚」に近いものであり，大墓のように集団墓的要素をもったものと理解されてくる。そして，中山5号塚の近くに片刈城跡や丸山城跡などが存在するところから，これらに関係する死者を葬った集団墓的な供養塚と考えるのが妥当かと思われる。しかし，金子氏が分布調査の報告書の中で問題提起されていた「三ツ又」という地名から考えられる交通に関する塚であるのかをみきわめることはできなかった。今後，文献資料等を通じて，片刈城等との関係や，「三ツ又」の地名から考えられる性格をもあわせて，検討材料としていきたい。

（駒形敏朗）

註 1. 金子拓男「中山5号塚」 長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書〔I〕 新潟県教育委員会 1977年

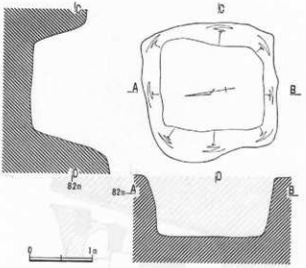
註 2. 戸根与八郎他「西蒲原郡黒埼町大墓遺跡調査報告」 埋蔵文化財発掘調査報告書 新潟県教育委員会 1973年

註 3. 金子拓男他「川治百塚第6号塚」 埋蔵文化財発掘調査報告書 新潟県教育委員会 1974年

7. 中山5号塚発見の炭焼窯

ここに紹介する2基の炭焼窯は，塚本来の調査目的からはずれているが，発掘調査中に発見されたものであることをふまえて，簡単に紹介したい。

(1) 第1号炭焼窯（図版第8図上，第16図）　第1号炭焼窯は塚の西側周溝の山側にかかるように周溝を切って地山の黄褐色土層を掘り込んで構築されていた。平面形態はこの地方では比較的少ないと言われている方形を呈している。掘り込み面の東側は周溝内にかかっており，東の上面は一段低くなっていた。



第16図　第1号炭焼窯実測図

窯壁は焼けてかたくなっているが，ガラス質にまでは変化していなかった。窯床には焼成をよくするために敷かれたと思われる粘板岩の塊があった。その上に1～2㎝の厚さで粉末になった木炭が堆積し，さらにその上には木炭が混入した黒褐色土が6～8㎝の厚さで堆積していた。木炭の他には遺物が出土せず，炭焼窯の構築年代を示す資料は検出されなかった。

なお，炭焼きの経験のある地元民によれば，平面が方形を呈し，素掘りのこの第1号炭焼窯は「伏焼法」による黒炭を生産していたのではないかと言われている。

（品田高志・駒形敏朗）

(2) 第2号炭焼窯（図版第8図下，図版第9・第10図，第17・第18図）　第2号炭焼窯は北側の沢に近い塚の墳丘部を利用してつくられていた（第4図・第6図）。第2号炭焼窯は笹郷の沢の奥に産出すると言う粘板岩を利用してつくられた「築窯製炭法」の炭焼窯である。形態はイチヂク形を呈した平炉である。焚口（トマロ）は柱状の粘板岩を左右に立てて焚口とし，その下部の両端には丸い粘板岩の塊りを入れて押えとしている。燃焼室の床は扁平の粘板岩を敷きつめてあり，左右および奥壁との境に沿って細いすき間がめぐって焚口に通じている。このすき間はおそらく排水の目的によって意識的に設けられたと思われる。燃焼室の壁は長方形の粘板岩を横にして積みあげられていた。壁の粘板岩は奥壁付近を除いて，上部に近づくにつれて細かく割れていた。特に焚口に近いところではそれが顕著であった。焚口付近の火力が最も強くなるために，壁の破損がはげしいものと思われる。

排煙口は奥壁の下部に設けてあり，日本炭焼窯の伝統的な構造をしていた。排煙口の上にある「排煙口掛け石」は耐火性の高い特別な石を用いておらず，厚さ10㎝の扁平な粘板岩を用いているにすぎない。

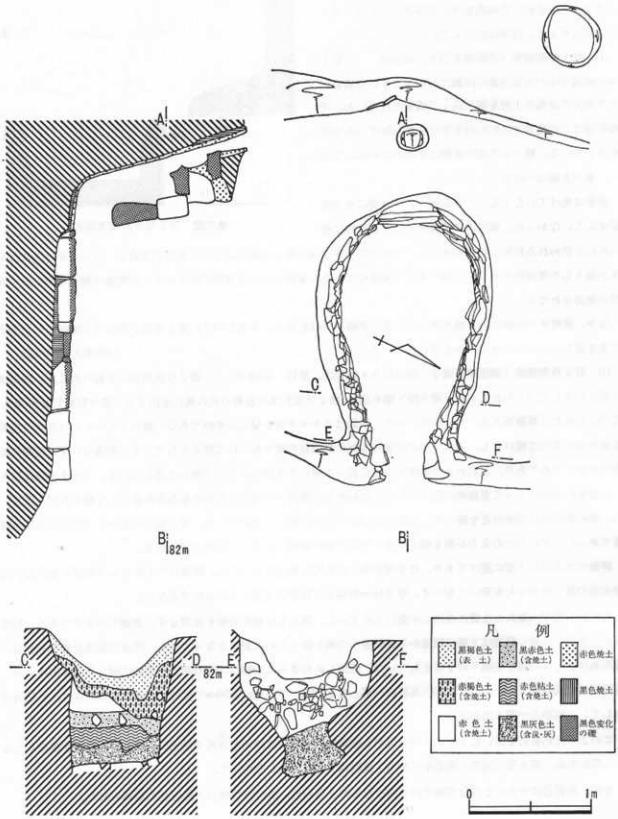
奥壁から約40㎝離れた位置に煙出しが設けられていた。煙出しは粘板岩等を使用せず，素掘りのままである。排煙口から煙出しに続く煙道は下部が煙道から燃焼室への風を防ぐために袋状となっていた。煙道は燃焼室側を粘板岩の積みあげとし，山側を素掘りのままとしていた。煙出しからさらに山側には塚の封土を垂直に削った痕跡がみられ，粘板岩が2枚残っていた。これも窯の施設の一部と考えれる。この他に径50㎝の柱穴が封土中に発見され，小屋掛けをしていた痕跡の一部と思われる。

このような粘板岩を用いたイチヂク形を呈する築窯製炭法の窯は岸本定吉[註]氏や地元民の話しから白炭を製産したものと思われる。第2号炭焼窯の築造年代を示す資料は1点も出土しなかった。

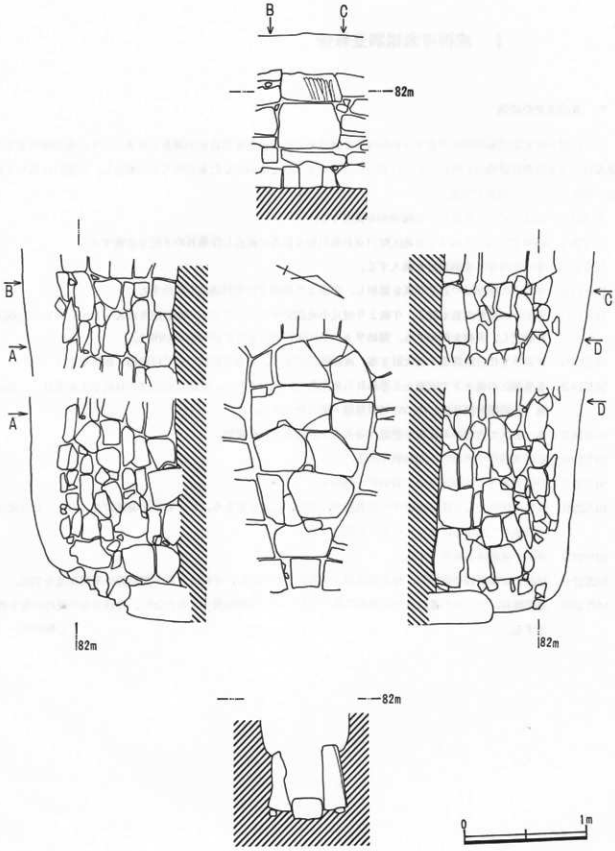
なお，粘板岩はナタのような刃物で打ち割ったものと思われ，痕跡が排煙口の最上部に認められた。

（駒形敏朗）

註　岸本定吉「炭」丸ノ内出版　1976年



第17図　第２号炭焼窯実測図（白抜きは礫）



第18図　第２号炭焼窯内部構造実測図（矢印は各断面との接合点を示す）

Ⅱ　座禅塚発掘調査報告

1.　発掘調査の経過

長岡市雲出町水梨3290番地に所在する座禅塚の発掘調査は長岡市教育委員会が調査主体者となり，発掘担当者及び調査員には社会教育課職員が当たった。作業員には宮本３丁目を中心とした有志の人々が参加し，下記の日程で手続き，準備を行ない，調査を実施した。

７月25日　文化庁長官に座禅塚の発掘通知を提出する。

９月16日　駒形学芸員が宮本３丁目地区町内会長布川初太郎氏に面会し作業員の手配を依頼する。

10月９日　午後座禅塚へ発掘機材を搬入する。

10月11日　午前中に座禅塚の近景写真を撮影し，午後より塚周辺の地形測量を開始する。

10月12日　午前中に地形測量を終了，午後より墳丘中央部を中心にして北から時計回りにA・B・C・Dと発掘区を設定し，発掘を開始する。開始早々，D区墳頂部付近で珠洲焼破片が出土。

10月13日　新潟県文化行政課金子文化財主事，高橋嘱託が来訪，発掘方法についての指導・助言をうける。

10月14日　各発掘区の盛土下で旧表土と思われる黒褐色土が検出される。地域整備公団の林氏他２名来訪し，地山層（魚沼層群第２層）についての指導・助言をうける。

10月18日　B，D区で古墳の周堤帯を想定させる人工的な高まりを確認。

10月19日　C区周溝内で大形の珠洲焼破片出土。

10月21日　D区周溝内より珠洲焼の大形破片一括出土。

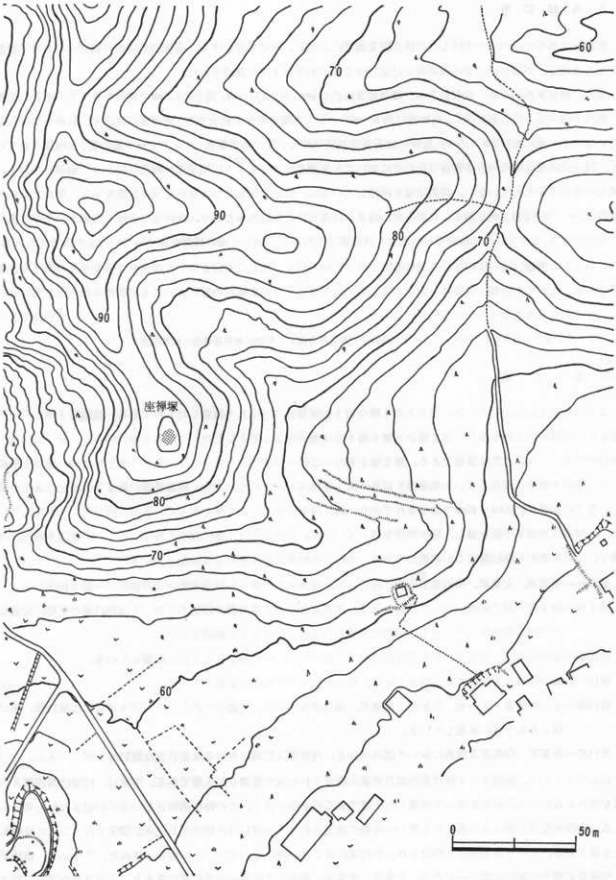
10月22日　昨日一括出土した珠洲焼破片の写真撮影，実測，収納を行なう。C，D区の発掘調査終了し，C区南側の周溝が二重構造になっているのを確認する。

10月24日　B区の発掘調査を終了する。

10月27日　塚および塚周辺の清掃後，塚完掘状態の写真撮影を行ない，午後より塚完掘状態の平板測量を実施。

10月28日　発掘機材，テントの撤収及び作業員の賃金支払い等の残務整理作業を行ない，約18日間の現地作業を終了する。

（寺崎裕助）



第19図 座禅塚周辺の地形図

2. 外部形態

座禅塚は黒川に向かって突出した舌状丘陵先端部に立地し，単基で存在する。発掘調査以前の観察による外部形態としては墳丘，周溝及び古墳の周提帯を想定させる人工的な高まりが確認された。

墳丘は裾部東西約5*m*，南北約7*m*，墳頂部東西約4.5*m*，南北約4.5*m*，高さ約1.3*m*の規模を有する。形状は北東～南西方向が長い長方形を呈し，長軸線は約N－47°－Eで丘陵の稜線と直交する。墳頂部には古木，石碑等は存在していないが，南に約1.5*m*下がった箇所には石油資源開発株式会社の測量原点（コンクリート製の杭）が埋設されている。墳丘南西部分は先の分布調査報告の中においても指摘されているように[註1]墳頂部～裾部に向かって崩壊しており，墳丘の原形は保たれていない。周溝は塚を回挽しているが，特に北西部分では良好な残存状態を示し，現在でも最大幅約1.5*m*，深さ約0.5*m*を測る。周提帯状の高まりは現高で最高約25*cm*を測り，南西部分を除く周溝外の全ての箇所で確認できる。このことから周提帯状の高まりは塚構築当時周溝と同じく塚の周囲をめぐっていたものと考えられる。

このように発掘以前の座禅塚の外部形態としては方形の墳丘，墳丘の周囲をめぐる周溝及び周提帯状の高まりが確認された。なかでも古墳の周提帯を想定させる人工的な高まりは歴史時代の塚においてまだ類例が報告されていないことからして本塚の有する大きな特色であろう。（寺崎裕助）

註1　山口栄一「座禅塚」（長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書1）新潟県教育委員会　昭和52年

3. 土　　層

本塚は旧表土を除去していない墳丘上に4層の封土を版築状に盛土して構築したものである。基盤層上面から墳頂部までの土厚は約1*m*を測り，第2層から第5層までは地山層を主体とした盛土で，第6層は旧表土，第7層は地山斬移層であり，共に自然堆積層である。第2層上部からは同一個体の珠洲焼小破片が数多く出土したが，他の土層においては第4層中に混在していた須恵器片以外の出土遺物は認められなかった。周提帯状の高まりは墳丘の表土と同じく第2層が厚さ約20*cm*～40*cm*で盛土されており，特に塚北西部において厚くなっているが，南西部には存在していない。周溝は断面V字状を呈し，塚の周囲を巡っているが，南西部には二重に設定されていることが確認された。周溝中には第8層から第14層までが堆積しており，それらの堆積状態は次のようになっている。

第8層―南東部，北東部，南西部B周溝[註1]に認められ，南西部B周溝からは珠洲焼の大形破片が一括で出土した。

第9層―第8層と同じ周溝において認められる。南西部A周溝とB周溝の接触点においては第11層の上層に位置しており，第11層よりも新しい時期に堆積した土層であることが確認された。

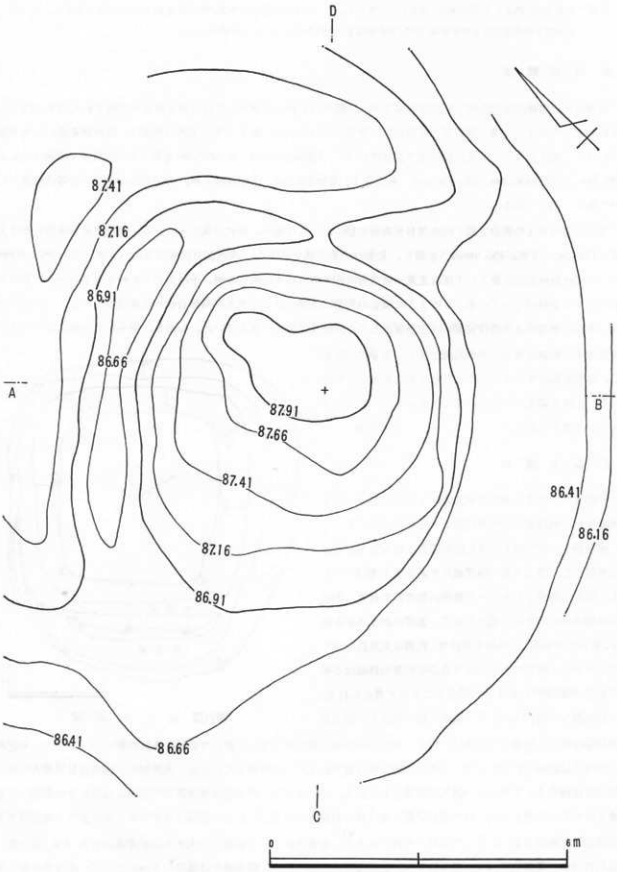
第10層―塚の北西部，南東部，北東部周溝において認められ，第13層よりも上部に堆積している。

第11，12層―南西部A周溝にのみ認められる。堅くしまって版築状に堆積している。

第13層―全ての周溝（北西部，北東部，南東部，南西部A）において認められる。南西部A周溝では第11層，第12層よりも下部に堆積している。

第14層―南東部，南西部A周溝において認められる。南西部A周溝における堆積状況は第13層と同じである。

以上のことから，ⓐ第8，9層は南西部B周溝が設定された後で堆積した土層である。ⓑ第11，12層は南西部A周溝を埋める目的で人的行為を伴って堆積した土層である可能性が強く，この時に南西部B周溝が設定されたと考えられる。ⓒ南西部B周溝はA周溝よりも新しい時期に設定された。ⓓ第13層は南西部B周溝が設定される以前に堆積した土層である。という事実関係が確認され，座禅塚には2回の機能期があることが明確にされた。すなわち，南西部A周溝設定期の座禅塚は墳丘―北西部，北東部，南東部，南西部A周溝―周提帯状の高まり，南西部B周溝設定期の座禅塚は墳丘―北西部―北東部，南東部，南西部B周溝からなっている。[註2]（寺崎裕助）


D
87.41
87.16
86.91
86.66
A
87.91
87.66
87.41
87.16
86.91
B
86.41
86.16
86.41
86.66
C
0
4m

第20図 座 禅 塚 全 測 図

註1　塚の南西部には周溝が2本確認されているが内側をA周溝，外側をB周溝とする。

註2　周堤帯状の高まりが塚南西部に存在していないということは南西部B周溝設定時に破壊されたものと考えられる。よって，南西部B周溝設定以後の座禅塚は周堤帯状の高まりを伴なかったものと推測される。

4. 内部構造

座禅塚の内部構造は地山層（魚沼層群第2層）に掘り込まれた周溝と，それに四方向をとり囲まれた方形の墳丘のみからなっており，土壙，集石等の内部施設は発見されなかった。断面「V」字状の周溝は，塚の南東部から南西部にかけて二重に巡ぐっている。規模は上部幅約1.9m，底部幅約0.5m，深さ約0.9mを測るが，南西部A周溝は上部幅約1.4m，下部幅約0.4m，深さ約0.8m，B周溝は上部幅約2.3m，下部幅約1m，深さ約0.4mで，後者は前者に比べて浅く，幅広である。

墳丘は南西部A周溝設定期と南西部B周溝設定期においては規模，形状が異なっている。南西部A周溝設定期は上部が約5.2m，下部が約6.9m四方を測り，形態は方形台状を呈する。南西部B周溝設定期の上部は約6.5m×4.6mで，北東ー南西方向に長く，下部は北東ー南西方向約8m，北東側約5.5m，南西側約3.6mを呈する不正三角形台状のプランを形づくっている。このように墳丘の形態は方形台状から不正三角形台状へと変化している。このことは，本塚が南西部A周溝設定期には方形塚としての形態及び機能を有していた。しかし，何らかの作用により従来より存在する周溝を埋め，その外側に新しい周溝を設定し，形態を異にすることによって他の目的を満たす塚（？）に作り変えられたということを示しているのではないかと考えられる。（寺崎裕助）

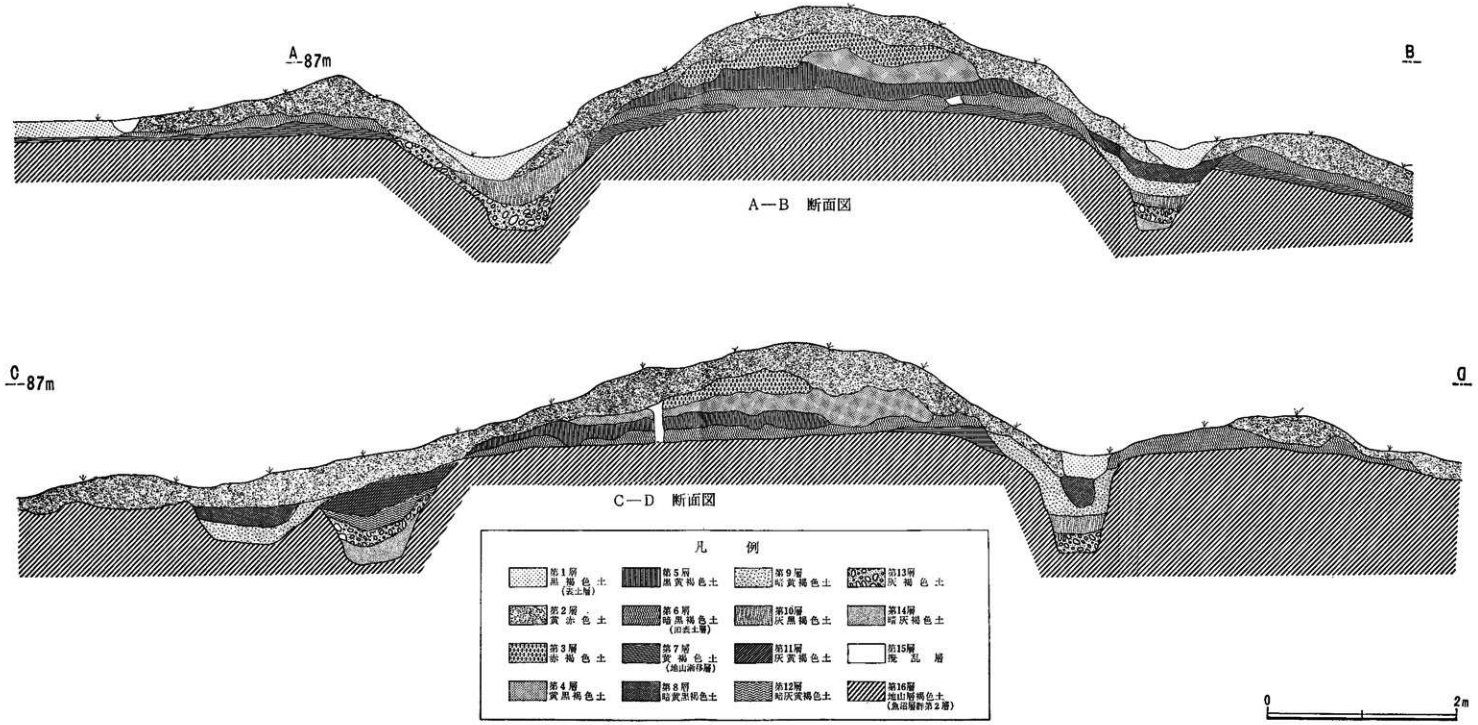
第21図　基底部遺構

5. 出土遺物

座禅塚からの出土遺物は須恵器片1点及び数十片の珠洲焼片で，墳丘及びその周辺部より発見されている。

須恵器片（第23図1）はC区の墳丘上第4層上部付近より出土し，甕又は壺の胴部破片であろうと想定される。器面は表裏ともヨコナデ整形が施されており，表面には綱目状の叩き目が認められる。器厚は約1.2cmを測り，胎土はきめ細く，焼成も良好で，色調は灰黒色を呈しているが，小破片のため大きさ及び年代等の詳細は不明である。塚構築時に封土中に混在したものと考えられる。

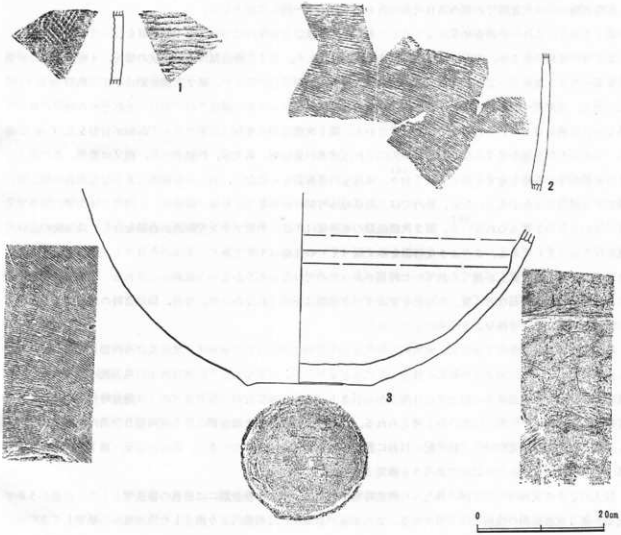
珠洲焼片（第23図2，3）は全て同一個体で，出土分布状態は墳丘の崩壊した方向に一致し，D区からの出土量が最も多く，次いでC区，A区の順になっており，B区からの出土は認められなかった。小破片は第2層（黄赤色土）中に散布していたが，大形破片は南西部B周溝内の第8層（暗黒褐色土）下部より一括して発見されている。このことから珠洲焼は南西部B周溝設定以後にその周溝中に廃棄されたものと考えられ，同周溝設定期の塚に伴う可能性がうかがえる。器形は復元された底部破片（第23図1），胴部破片（第23図2）からして広口の大甕であろう[註1]と推定される。底部破片の大きさは底部直径約20.4cm，最上部口径約70.4cm，現高約30.4cm，器厚約1cm，底部器厚約3cmであり，胴部破片は器厚約1cmを測るが，直径等の他の規模は不明である。器外面には器面調整のために右下がりの条線状の叩き目，器面裏には器外面の叩き目に対応する円



第22図 座禅塚断面図(白抜きは攪乱層)

形凹のおさえ痕が施され，底部より約21cm上方のところには粘土帯の接合痕跡が認められる。なお叩き目の右下がり傾斜は底部に近づくにしたがいゆるやかになり，叩き目の順序はまず頸部から底部方向へと縦に施され，これが左回転で器面を一周している。色調は灰黒色を呈し，胎土はきめ細く，焼成も良好である。

このような広口大甕は壺，擂鉢などと共に珠洲焼のセットを構成している基本的な器形であり，珠洲焼成立期の平安時代後期（12世紀後葉～13世紀初葉）から終焉期の室町時代中・後期（15世紀頃）までの全ての時期において認められる。しかし，これ自体に年代を示すものがなく，伴出する擂鉢等の他の珠洲焼によってその年代を推定するにとどまっている。本県でも杉之森遺跡[(註2)]（室町時代中・後期，15世紀頃），上除館[(註3)]（室町時代中・後期，15世紀頃），五十嵐小文治館[(註4)]（鎌倉時代後期～室町時代，13世紀後半～14世紀頃），釈迦堂遺跡[(註5)]（室町時中・後期，15世紀頃），名立沖タラバ[(註6)]（鎌倉時代，13世紀）等から数十個体以上の出土例及び海中からの引き上げ例が知られている。なお，本塚出土の広口大甕破片には伴出遺物がなく，年代決定は不可能であるが，県内の前述遺跡の出土例から推測して鎌倉時代～室町時代（13世紀～15世紀）の間にその年代的位置を求めることができるであろう。（寺崎裕助）



第23図　座禅塚出土遺物（須恵器・珠洲焼）

註　1　金子拓男他「名立タラバ発見の六個一組の珠洲焼」越佐研究第35集　昭和50年

2　戸根与八郎「南蒲原郡中之島村杉之森遺跡発掘調査報告」新潟県教育委員会　昭和51年

3　中村孝三郎「上除城館址発掘調査報告書」長岡市教育委員会　昭和51年

4　金子拓男「五十嵐小文治館発掘調査報告書」新潟県南蒲原郡下田村教育委員会　昭和48年

註　5　関雅之他「西蒲原郡黒埼町釈迦堂遺跡調査報告」新潟県教育委員会　昭和48年

　　6　註1と同じ

6. ま　と　め

座禅塚の地理的歴史的環境，外部形態，内部施設及び出土遺物等の調査結果を集約すると

①眺望のきく舌状丘陵先端部に単基で所在し，西側は尾根線を経て岩野城址に連する。

②周溝は南西部が二重に設定されて塚の周囲をめぐっている。

③南西部A周溝設定期と南西部B周溝設定期という2回の機能時期が存在した。

④封土は4層からなり，版築状の堆積を示している。

⑤墳丘の形態は方形台状（南西部A周溝設定期）と不正三角形台状（南西部B周溝設定期）を呈する。

⑥塚の南西部を除いた周囲には周堤帯状の高まりが巡っている。

⑦土壙，集石等の内部施設は存在しない。

⑧珠洲焼の広口大甕破片が南西部B周溝内第8層下部より一括して出土した。

の如くであり，これらの調査結果をもとにして本塚の性格及び造築年代について若干の考察を行ってみたい。

まず塚の性格であるが，本塚には2回の機能時期が存在した。第1次機能期は方形台状の墳丘，4層からなる版築状堆積の封土，北東部―北西部―南東部―南西部A周溝，周堤帯状の高まり，第2次機能期は不正三角形台状の墳丘，封土，北東部―北西部―南東部―南西部B周溝，珠洲焼の広口大甕で構成されており，それぞれの時期において異なった性格を有していたと考えられる。すなわち，第1次機能期の本塚は方形プランで断面が台形をなす塚である。このような形態を呈する塚は金子拓男氏によれば密教の修法壇，風大塚，修験者の墓，崩又は墓所，真言葬法による火葬地等の性格を有する塚とされており[註1]，本塚も内部施設をもたない，封土が版築法であるなど密教の修法壇に類似する特徴がうかがえる。なお，県内では三島郡越路町朝日百塚第131号塚（殿様塚）が密教の修法壇に該当する塚でなかろうかと考えられている[註2]。第2次機能期の座禅塚は不正三角形プランで断面が台形をなし，珠洲焼の広口大甕を伴う塚（？）である。このような特徴を示す塚（？）の性格は不明であり，本塚が今日でも「座禅堂」と呼称されていることから「堂」が建てられていた時期があったのではなかろうかという推測がなされる。しかし，発掘調査によっては柱穴，礎石など「堂」の存在を立証すべき根拠は検出されなかった。今後，類似資料の増加をまってさらに検討を加え，その性格をより明確にしていきたい。

次に座禅塚の造築年代であるが，絶対的な年代を示す資料は発見されておらず，墳丘及び南西部B周溝内より出土した珠洲焼によっておおよその年代を推定するにとどまりたい。前述したように本塚出土の珠洲焼は広口大甕の底部破片で，県内の他の遺跡から出土または海中から引き上げられた類似資料の相対年代により鎌倉時代（13世紀）～室町時代（15世紀）の所産ではないかと考えられる。この珠洲焼が第2次機能期に伴う南西部B周溝内第8層より出土したことは同周溝が室町時代（15世紀）以前に設定されたことを示すものであり，本塚の造築（第1次機能期）→改築（第2次機能期）もそれ以前であろうと推定される。

以上のように座禅塚には2回の異なった機能時期が存在し，第1次機能期には密教の修法壇としての性格がうかがえるが第2次機能期の性格等は不明である。また本塚の造築年代は周溝内より出土した珠洲焼から推定して室町時代（15世紀）以前であろうと考えられる。

（寺崎裕助）

註1，2　金子拓男他「川治百塚第6号塚」新潟県教育委員会　昭和49年

中山5号塚遠景（東から）

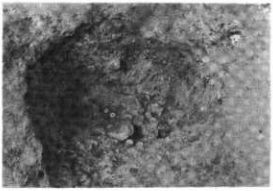
中山5号塚近景（西から）

中山5号塚近景（北東から）

中山5号塚発掘風景

中山5号塚発掘風景

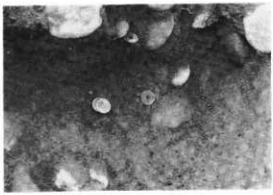
第2号炭焼窯実測風景



第1号集石下ピット内出土状況

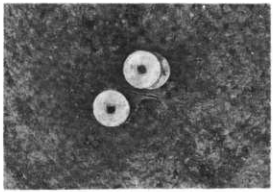
第3号集石下ピット内出土状況

第2号集石内出土状況

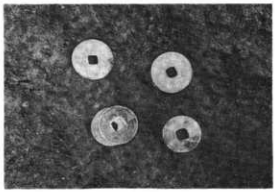


第2号集石内出土状況拡大

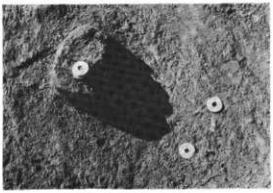
周溝内出土状況



杉板上出土状況



塚基底部出土状況



塚基底部出土状況

中山5号塚貨銭出土状況

中山5号塚D－C断面

中山5号塚D－C断面

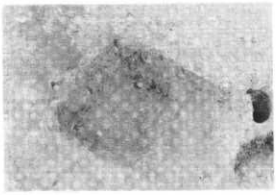
中山5号塚D－C断面（周溝部）

中山5号塚D－C断面（周溝部）

中山5号塚第1号土壙

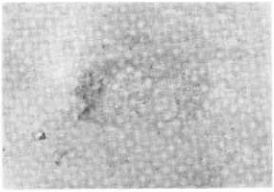
中山5号塚基底部遺構（南上から）

第 1 号 集 石



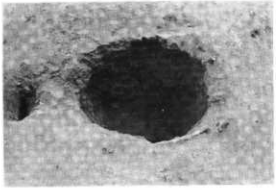
第1号集石下ピット

第 2 号 集 石



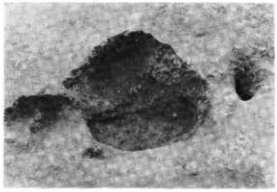
第2号集石下ピット

第 3 号 集 石

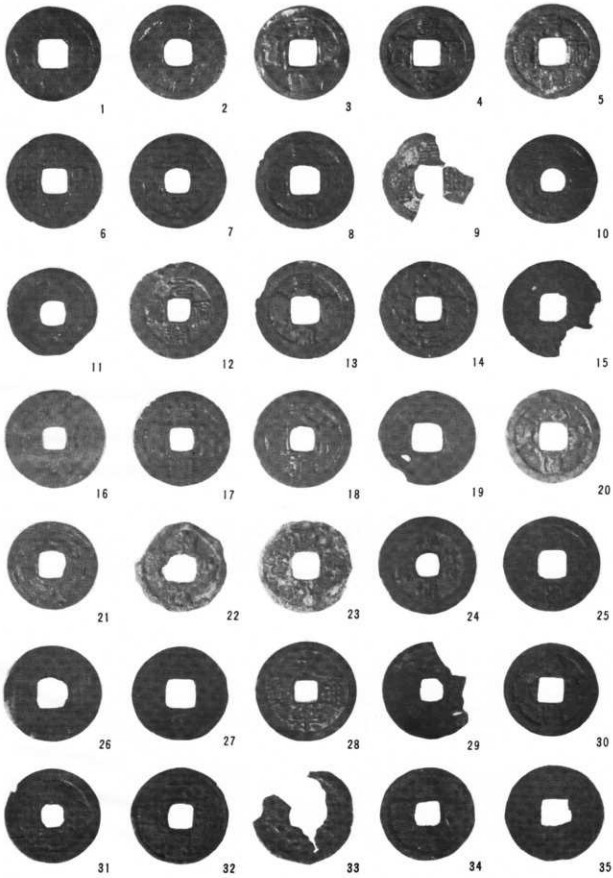


第3号集石下ピット

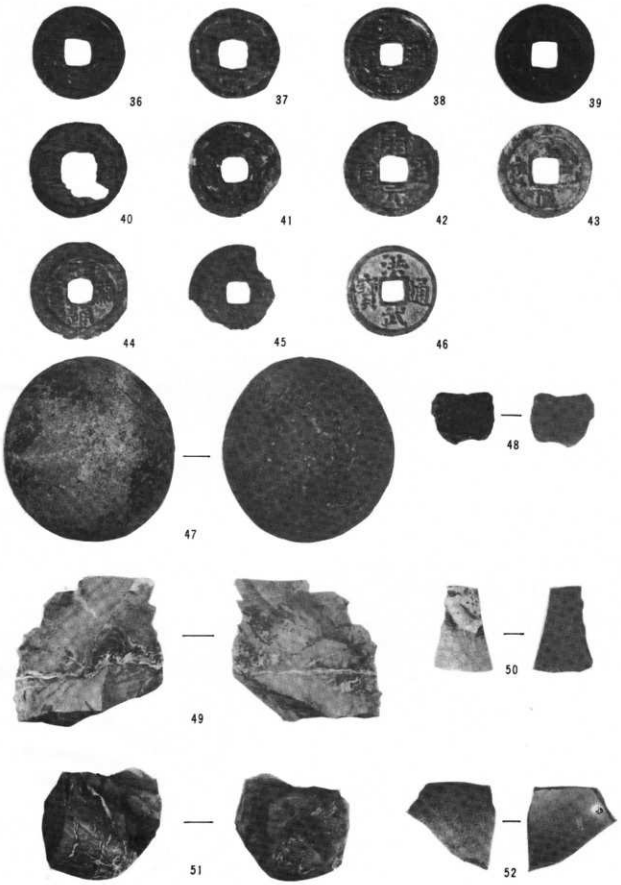
第 4 号 集 石



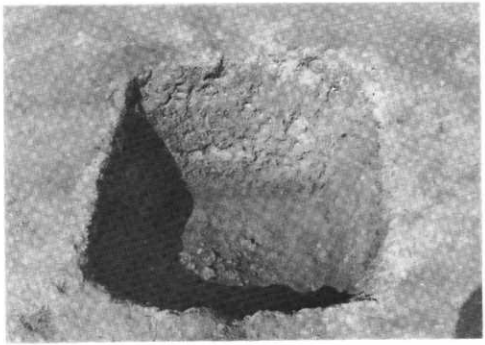
第4号集石下ピット


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35

中山5号塚出土貨銭



中山5号塚出土遺物（貨銭・石器・縄文土器・磁器）



中山5号塚第1号炭焼窯

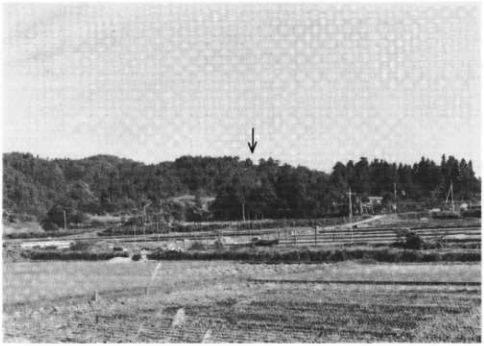
中山5号塚第2号炭焼窯

中山5号塚第2号炭焼窯（トマロ）

中山5号塚第2号炭焼窯（奥壁及び煙道部入口）

中山5号塚第2号炭焼窯(東壁)

中山5号塚第2号炭焼窯(西壁)



座　禅　塚　遠　景（南から）

座　禅　塚　近　景（西から）

座禅塚発掘風景

座禅塚発掘風景

遺物出土状態

遺物出土状態

座禅塚A－B断面

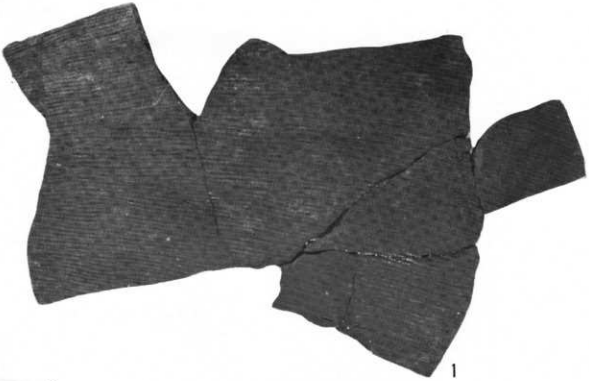
座禅塚A－B断面

座禅塚周溝

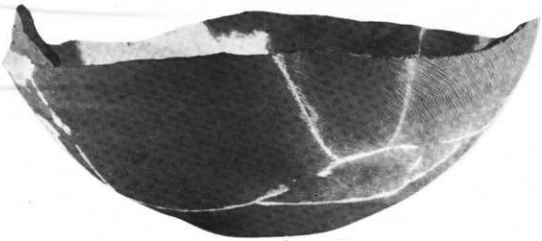
座禅塚基底部遺構（東から）

座禅塚基底部遺構（北西上から）

座禅塚基底部遺構（南から）



1



1 2

座禅塚出土遺物(珠洲焼)

長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書

（中山5号塚
座禅塚）

昭和53年3月27日印刷
昭和53年3月31日発行

発行　長岡市教育委員会
印刷　北越印刷株式会社